

『幸せを呼ぶ魔法』

春日あかね

4,912文字

(あらすじ)

ライターの子は上司に言われ「日本のキレイ」についての原稿を書いている。が、なかなか進まず、子どもの頃の思い出に浸ってしまう。そして、いつしか夢の中。そこで体験することから、ついに「日本のキレイ」を悟る。果たしてそうして完成した原稿の出来は？

日本で生まれ、日本で過ごしていると、なかなか気づかないことがある。でも、一旦、国を離れ、遠くからその小さな島国を見ると、気付くことがある。それは、日本はキレイな国だということ。もちろん、他にもキレイな国はたくさんある。シンガポールやドイツやスウェーデンやスイスなど。ただ、ここで話そうとしているのは、外見のキレイだけでなく、内面のキレイも含まれるということ。日本が欧米文化を受け入れても、どこか日本のキレイは普遍的で変わらない。それは一体どこから来るのか……。

大都会のオフィス。レストランや居酒屋に灯りがつき、夜の街へと移り変わる。そんな中、オフィスで一人PCの画面をずっと見つめるサキ。「日本のキレイ」についての原稿を書かなくてはならない。見た目に強面の50代の女性編集長からの命令だ。「なんで私が……」思わず、編集長を恨みたくってしまう。「いや待てよ……。昨日、編集長から寿司おごってもらったし……」と、腕を組み、頷いた。「でも、待てよ……。あのお寿司！編集長の策略だったんだ！」と、自分自身に言い聞かせ、うんうんと頷いた。でも、結局のところは、「ふ〜う」とため息を漏らすのであった。窓越しに佇み、自由気ままに生きていけたらなあと思いにふけた。そんな時、ふと、子どもの頃のことを思い出した。

サキの父親は新聞社に勤めていた。ある日、ロンドン支局への勤務を命ぜられた。ずいぶん迷った末に家族でロンドンへ移住した。ロンドンでの生活は悪くなかった。様々な人種の人が生活し、文化レベルも高く、路上ではオペラが流れている。「子どもの教育にはいいところだな」と、サキの父親と母親はサキ(当時5歳)を現地の小学校に入学させることにした。

「サキはラッキーだわ。英語も覚えるしね。将来が楽しみ、あなた！」サキの母親は笑顔で言うのだった。

サキは両親の希望通り英国暮らしを楽しみつつ、英語も習得し、すくすくと成長していった。

ところが、在住開始から5年後に父親の会社のロンドン支局での任務が終了し、家族は帰国をすることになったのである。帰国するのは残念とはいえ、両親はホッとしていた。なぜなら、夢のような生活が永遠に続くわけではないことは承知だったから。いつかは帰国し、時計を逆戻しするようにかつての生活に戻らなくてはならないのだ。特に、日本という独自の文化を持ち、それを大切にしている国に精神ともに戻していかなければならないのだった。

すでに英国生活に溶け込んでいたサキ。英語と日本語を上手に使い分け、何の不自由もなく過ごしてきた。が、帰国後初めて行く日本の学校。戸惑った。でも、行くしかない。

「よ、よ、よろしく」サキはクラス全員を目の前にしてぺこりとお辞儀をした。最前方に座っていた少年が「英語、話せるの？」と。続いて、後ろの席から三つ編み姿の少女が、まっすぐに挙手し、「ピーターラビットに会ったことある？」目をキラキラさせ、小さな体からできる限りの声を発した。

「ハリーポッターに出てくる hogwarts (魔法学校) に行ったことある？」黒縁メガネをかけた少年が鉛筆を魔法の杖代わりにし、素早くクルクルと回して見せた。その後もクラスメートから様々な質問が飛び交った。みんな、外国に興味があるらしい。サキはみんなからの質問に丁寧に答えた。みんなはサキの話に興味津々だった。

キーン・コーン・カーンコーン・キーン・コーン・カーンコーン♪

「起立～！」ガタガタと子ども達が立つ。

「礼！さよならあ」と、学級員が元気よく挨拶をすると、残りの児童がこだまする「さよならあ」

サキは見様見真似で他の児童と同じようにたどたどしくお辞儀をした。そのすぐ次の瞬間！サキは目を丸くした！児童たちが机と椅子をまとめてズズズと教室後方へ引きずっていくではないか！一体これからこの教室では何が行われるのか、それを考えるとゾッとした。

「サキちゃんも机を後ろへやってね」ハッと振り返ると、そこには隣の席に座っていたユキがいた。

サキは慌てて、机と椅子をズズズと引きずった。すべての机と椅子が教室後方にまとめられた。いよいよ何かが始まる！でも、一体何が！？

子ども達はバタバタと教室の隅にある物置へと移動した。物置を開け、取り出したのは、ほうき。また、数名の児童たちが廊下にかけてられた雑巾の方へと走って行った。雑巾を握り、教室へ入ると、皆、横に並び、しゃがんだ。それから、膝を床に下ろした。雑巾をポンと前方に置くと、その両端にトンと両手をついた。

「いち、に、いち、に！」子ども達は声を揃えて、腰を上げた。まるで「よ～いドン！」の格好だ。両手は雑巾両端に置いたままリズムに合わせ、雑巾を床から離すことなく、前後に滑らせた。みんなが一斉に揃って「いち、に、いち、に！」のリズムで体を前方へと移動させる。埃でいっぱいだった床が段々と綺麗になっていった。「アメイジング！（すごい！）」感動するばかりのサキであった。すると、背後から「日本の学校では放課後に学校を掃除するんだよ」と、男の子の声がした。その声は先ほどの魔法の杖の少年である。

「どうして？」

ほうきに跨り、「さあ？」

「イギリスの学校では、掃除はクリーナー（清掃員）のお仕事なの」

「へえ～。いいなあ」と言い切って（魔法の？）ほうきに跨ったまま教室中をジグザグと駆けて抜けていった。

サキは廊下へ行き、雑巾を取り、教室で雑巾がけをしている児童に混じった。膝をつき、両手を雑巾の上に置き、みんなと一緒に「いち、に、いち、に！」と雑巾がけを楽しんだ。「いち、に、いち、に！」という掛け声がグルグルと頭の中を駆け巡った。「いち、に、いち、に！いち、に、いち、に！いち、に、いち、に！・・・」

パタパタパタ！誰かが早足で駆けていく音で目がさめると、そこは何やら様子が違う。

「な、何、これ?!」

「さあ、どいた！どいた！」

背後から着物を着た子どもたちがほうきや雑巾を持ってパタパタと通り過ぎた。

「はい、これ」

振り向くと、そこには、緋(かすり)の着物姿の少年が雑巾を差し出していた。頭はきれいに刈り取られて丸坊主。足元を見ると、裸足。まるで遠い昔々の時代の子ども…。

「ここは一体どこ？」サキは心の中でつぶやいた。目を擦ろうと腕をあげると、着物のような袖…。やっぱり緋(かすり)の着物。恐る恐る視線を上から下へ向けると、案の定、素足。「ひえ～！」息を飲んだ。

「掃除は大切な修行の一つ」また別の少し大きな体の少年が言った。その声は少し低くて牛蛙のような声だった。少年の着物の裾は短い。すね毛が少し見え隠れしている。「これからこの寺子屋の雑巾がけだ。床、机、黒板をしっかりと拭くんだぞ。途中でサボるようなことがないように。拭き終わった後、すべてがピカピカでなければならぬ」牛蛙の声が部屋じゅうに響きわたった。「さあ、始め！」と、合図の声と同時に子ども達は一斉に雑巾がけを始めた。

「これこそが禅の教え」見上げると、そこには師匠らしき人の姿が。「気分が沈んでいても、掃除をして汗をかくと、嫌なことも忘れてしまう」師匠の話には何か惹きつけられるものがあった。「机や黒板などものには、一つ一つ心がある、まるで生き物みたいに。自分たちで使うものを綺麗にするというのは、ものを大切にすることにつながる」「雑巾がけだって、大切な意味があるんだぞ。体を動かすことで、精神を整えることになる。精神が整うと、人は自然と落ち着く。心が清められ、自然にそれが行動や言動に表れる。それが周りの人に伝わるんだ」

その時、サキは何ともいえない心地よさを実感していた。「そうか、もしかしたら、日本の学校で掃除をするというのは、こういう考え方からきてるのかも…」

と、突然「ふわっ！」大きなあくびが出た。心が落ち着きすぎたのか、急に睡魔に襲われた。

何時間眠り込んでしまったのだろうか。またまた、人のザワザワする声で目覚めた。そこは見慣れた風景。かつてイギリスで過ごしたプライマリースクール(小学校)だった。いつの間にかプライマリースクール(小学校)の頃へとタイムスリップ。呆然と立ち尽くす少女姿のサキ。衣類は着物じゃない。プライマリースクール(小学校)の制服をまとっていた。が、ついさっきまで使っていた寺子屋の雑巾をぎゅっと握りしめていた。

「何それ？」一人の少年が指差した。

「あ、これね。えっと～」と、サキの中である言葉が浮かんだ。

「ふふふ…。(笑)これはね、魔法のナプキン(雑巾)よ！」と、少年の視線に合わせ、雑巾を上げて見せた。

「へえ」少年が雑巾を不思議そうにまじまじと眺めた。

「見てて」

得意そうに言うと、サキは床の雑巾がけを始めた。すると、みるみるうちに床がピカピカになっていく。少年の目が大きく見開いた。そこへ一人二人とクラスメートたちがやってきた。サキの見事な雑巾がけパフォーマンスにもう目が離せない。

「これ、私？」自分でも信じられないくらい体が自由気ままに動いていくのを感じた。意思とは別に体が動く、動く、動く。気分は最高！見事なダンスを披露した。もちろん、雑巾がけをしながらの話だが。

「クール！（かっこいい！）」

「僕もやる！」

「私も！」

ザーンと、雑巾が上から降ってきた。と同時に軽快な音楽がスタート。子ども達はヒラヒラ舞い上がる雑巾を次から次へとキャッチし、雑巾がけを始めた。リズムに合わせて、体を動かし、雑巾がけ。床だけでなく、壁、柱、黒板、机、椅子など教室の隅々までピカピカになっていった。

掃除がほぼ完了したその瞬間、教室は静かな空気に包まれた。その時、窓からサーッと光が差し込めた。光はキラキラと美しくみんなの顔を照らした。「この気持ちは一体・・・」誰もが幸せな気分でいっぱいになり、笑顔を浮かべた。子ども達は輪を作り、手をつないだ。サキにはもうわかっていた。掃除をすると、自然と笑顔になり、心が優しくなるということ。

それ以来、不思議と学校ではいじめの問題も些細な喧嘩なども一気になくなったのである。何が特別な指導が行われたわけでもない。ただ、子ども達が自分達で教室の掃除を行っただけである。

「桑山さん」

誰かの声がし、サキは目を覚ました。声の主は後輩の吉川だった。

「あ、私、眠ってしまったのね」

「はい、そのようですね」

「じゃ、あれは夢？」

「え？なんですか？」

「いや、なんでもないわ」とは言ったものの、あるアイデアが浮かんだ。

「そうだわ。あのことを書けばいいのよ」

「あのことってなんですか？」

「原稿よ。編集長に依頼された記事」

「あ～、あれですね」

「そうよ」

なんとか記事がまとまりそう。そう思うと、なんだか嬉しい気分だった。夢の中の寺子屋。「日本のキレイ」はまさに学校の掃除が原点。掃除は優しい心を生み出す魔法。一つ一つのをキレイにすることで、幸せを呼び、みんなが笑顔になる。なんて素敵なんでしょう、日本のキレイって！

グェッ！

「ごめん！ついおなかが空いて・・・」サキは顔を赤くした。二人は顔を見合わせて笑った。

「ラーメンでも食べに行こうか！この近くに美味しい店があるのよ」

「いいですね！」

吉川とサキはオフィスを後にし、仕事帰りのサラリーマンや OL で賑わう夜の街へと繰り出した。

(「日本のキレイ」のお話はこれでおしまい)

(あとがき)

原稿が完成し、記事の出来具合は予想以上のものだった。「さすが寿司効果！」編集長も大満足で終始笑みを浮かべていた。その後、サキは得意な英語を生かし、翻訳バージョンも発表した。海外からの評価も高く、学校を掃除するという日本の習慣が注目されるようになった。海外の教育使節団が次から次へと日本の学校を訪れ、掃除風景を見学した。教室の床を横に並んで一斉に雑巾がけをする児童たちを見て、使節団メンバーは口々に「マーベラス、ワンドフォー、インクレディブル、ブリリアント(*全て意味は「素晴らしい」)」と発した。これが舞台であれば、スタンディングオベーション(拍手喝采)「ブラボー！」というところでしょうか・・・。

(これでホントにおしまい！)